

第10回神戸市政調査会議事要旨

日時：2026年5月7日（木曜）13時30分から15時30分

場所：市役所1号館14階大会議室

委員出席者（あいうえお順）

織田澤 利守 神戸大学大学院工学研究科教授
佐合 純 iC株式会社代表取締役
品田 裕 神戸大学大学院法学研究科教授
谷口 真澄 神戸市行財政局公文書アドバイザー

神戸市出席者

久元 喜造 神戸市長
西尾 秀樹 企画調整局長
本田 互 企画調整局部長（都市デザイン担当）
尾添 順 建設局公園部企画課長

■全体要約

公園を、市民が楽しさや愛着を入口に無理なく関わり、既存活動への敬意を保ちながら新たな参加を広げる実践の場として検討した。箒衆や縁衆等の取組を通じ、活動の可視化、ついでの参加、つなぎ手の役割、デジタル活用の可能性が議論され、行政主導の制度化ではなく、地域ごとの自律的な関わりをどう育てるかが中心的な論点となった。

■議題

公園における市民参画の仕掛けを手がかりとした、参加の入口、活動の継続、つなぎ手、リアルとデジタルの関係性及び他分野への横展開

■会議冒頭における市長及び座長の発言の概要

○品田座長：

前回は、対話の場をどのように設計し、継続し、参加の輪を広げるかについて、政策課のワークショップを例に議論した。対話を正面から掲げるよりも、別の活動に付随して自然に関わりが生まれる場をつくること、場の成否はテーマだけでなく空間、居心地、作法にも左右されることが確認された。本日は、既に一定程度、場として機能している公園の実践事例を手がかりに、他の場へどう横展開できるかを議論する。

○久元神戸市長：

公園を一つの事例として、市民が「自分も役に立ちたい」という思いを持ち、具体的に参加するにはどうすればよいか、活動の輪をどのように広げ、継続していくかを議論したい。あわせて、リアルとデジタルの交錯のあり方も議論の対象とする。

■各トピックにおける主な意見及び論点

トピック 1：公園における新たな関わり方と参加の入口

【論点】

建設局から、公園・緑をめぐる担い手の減少や、日々の維持活動が見えにくいという課題を背景に、「行きたい」をつくること、「ついで」をつくること、「営みの見える化」を進めることが取組の柱として示された。神戸菜園プロジェクト、バスケットゴール倍増計画、オープンレンタルスペース、箒衆、真野地区のスタンプラリー、神戸緑縁衆等は、従来の担い手だけに依存せず、気軽な来訪やついでの行動を公園への関わりにつなげようとするものである。議論では、こうした取組が実際にどのような参加を生んでいるのか、個人が自分のタイミングで関われる仕組みになっているのか、また、既存活動への敬意を保ちながら新しい参加をどう重ねていくかが論点となった。

【主な意見】

○建設局：

公園は、自然のある屋外で、誰でも一人から、世代を問わず利用でき、目的がなくても過ごせる場所である。一方で、担い手は存在するものの新たな参加が少なく、来訪が関わりの連鎖につながりにくい。神戸菜園プロジェクト、バスケットゴール、オープンレンタルスペースは、公園に行く新たな目的をつくり、従来公園との関わりが薄かった世代にも来訪を促す取組である。

○建設局：

箒衆は、公園に来たついでに掃除をしたいという声をもとに、個人や親子が任意のタイミングで参加できる清掃ボランティアの仕組みとして始めた。Web 登録、軍手やバッジ、掃除レポートにより、活動が周囲にも見える形になっている。真野地区のスタンプラリーでは、子どもが管理会の活動日に清掃を手伝い、スタンプを集めることで、子どもや保護者の参加、ボランティア側の意欲向上につながっている。

○建設局：

神戸緑縁衆は、「管理」という硬い印象を和らげ、公園で行われる多様な営みを「〇〇衆」と名付けて見える化する取組である。掃除をする箒衆、ドッグランの愛好家である犬走衆、ラジオ体操や桜の育成など、日常の行為に名前を付けることで、既存の活動や新たな活動を

自然体のまま浮かび上がらせることを目指している。

○委員発言：

箒衆は、皆で集まって一斉に行う活動ではなく、公園に来た人が自分のタイミングでさっと掃除する形を狙っているように見える。実態として個々に活動しているのか、誰かの活動をきっかけに会話や共同作業が生まれているのかが重要である。スタンプラリーの発案者や、ピザ釜衆のような活動に手を挙げる際の入口、制約の有無も確認したい。

○建設局：

箒衆は、公園管理会のような定例的な集合活動とは異なり、一人でも親子でも任意に参加できることを想定している。活動後は Web 上で任意であるが掃除レポートを投稿でき、子育てサークルで清掃した例も出ている。ピザ釜衆は、火の管理や届出、近隣への配慮が前提となるが、地域イベントとして実施可能であり、できないと思われがちなこと実はできると示す狙いがある。

○企画調整局：

真野のスタンプラリーは、小学校でのワークショップ後、管理会や PTA との話し合いの中で、PTA から出た提案をもとに始まった。子どもはスタンプを押す行為を好むため、活動への入口として有効である。緑縁衆についても、子どもがジュースやスタンプに惹かれて行動するような、自律的行動を促す入口を意識している。

○委員発言：

一人で黙々とトイレ掃除やごみ拾いを続けてきた人をリスペクトしながら、多くの人が「ついで」に関わる形へ転換していく過程が大切である。一人の頑張りを見える形にし、その声を拾い上げることで、たくさんの輪が生まれていく可能性がある。

○委員発言：

今回の取組は非常に良いものだが、自分も資料を見るまで知らなかった。もっと知ってもらいたいという思いがある一方で、既に活動している人たちとの関係や、どの段階で外へ広く発信するかには配慮が必要である。型があることで参加のハードルが下がるため、行政が面倒な部分を整理し、民間でも真似しやすい入口を用意している点に可能性がある。

○建設局：

PR や広報については、まだ始まった段階であり、まずは市内、地域、区役所、既存の公園ボランティアに知ってもらう必要がある。一方で、これまで活動してきた人が、急に全体が変わったように感じて悲しい思いをしないよう、緩やかに、にじみ出すように広げることが

望ましい。

トピック2：継続性、愛着、つなぎ手の役割

【論点】

良い取組であっても、知られていなければ広がらず、既存の担い手との関係を損なえば持続しにくい。中盤では、公園の取組が参画を増やし、仲間を増やし、継続的な活動として受け継がれていくものになるのかが問われた。活動の継続には、楽しさ、愛着、地域への位置付け、情報提供、地域コーディネーター、NPO、学校、企業などをつなぐ役割が重要となる。

【主な意見】

○企画調整局：

第衆には潜在的なニーズが相当あると感じている。ラジオ体操後に少し掃除したいので箒だけ欲しいという声もあり、「ついでに何かしてくれそうな人」はかなり存在する。菜園についても、公募に想定以上の応募があり、公園が好きな人は多い。今後は部署としての体制やスキームが課題である。

○建設局：

公園に関わる担い手を広げるには、「楽しい」「遊び」の要素を入れる必要がある。横展開と継続性については、地域コーディネーターとも連携しながら、地域の中でその活動が必要なものとして位置付けられることが重要である。行政がやりたいことをお願いする形だけでは、体制、予算、自立性の課題が残る。

○委員発言：

公園は日常的に使われる場でありながら、時々、非日常的に楽しいことが入ることで持続可能性につながる。公園管理会には助成金申請などの事務的案内は届くが、新しい取組の情報は届きにくい。Webでもよいので情報提供があれば、小さな公園でも掃除用具入れを工夫するなど、自分たちなりの展開が可能になる。

○委員発言：

公園管理会と新しい動きの関係は、町内会と新しい地域活動の関係に似ている。公園でモデルケースをつくることができれば、将来的に町内会と補い合うような新しいシステムに近づく可能性がある。小さな公園へのアプローチでは、地域コーディネーターより現場に近いコミュニティナースや「街のお節介」のような存在も考えられる。

○委員発言：

既に活動している人にはプライドがあり、新しい仕組みが先に広く知られすぎると、乗っか

ることへの抵抗が生まれる可能性がある。公園ごとにステークホルダーを探すだけでなく、地域コーディネーター、コミュニティナース、NPO など、地域を横断的に見ている主体と相談ベースで連携することが重要である。

○建設局：

神楽公園では、地域 NPO が高校生との間に入り、地域のステークホルダーや課題、学校の事情を踏まえた関わりが生まれた。公園だけでなく地域を横断的に見ている NPO の話を聞くことは重要であり、行政側から積極的に寄っていく必要がある。

トピック 3：世代、企業、デジタルを介した接点づくり

【論点】

学校を通じた参加は効果的である一方、卒業後に関わりが途切れる懸念がある。子ども、保護者、高齢者、企業、地域団体が同じ場で関わる仕掛けをどうつくるかが論点となった。デジタルは、参加前後の接点づくり、個人を集合体にする、記録や経験を蓄積・共有・継承することに可能性があるが、交流機能を行政主導で扱うには慎重なルール設計が必要となる。

【主な意見】

○建設局：

住宅地内の公園は約 1,500 か所あり、菜園は 3 公園、バスケットゴールは 80 か所程度、レンタルスペースは 1 公園、箒衆は湊川公園から展開する段階である。まだ始まったばかりであり、横展開は今後の課題である。スタンプラリーでは、小学生が清掃する高齢者と出会い、公園には掃除している人がいると知る経験そのものが成果である。

○委員発言：

子どもを巻き込むと親もついてくるが、学年が上がると関わりが途切れやすい。毎年新しく入る人と、継続して関わる人の両方が必要である。世代によっては、楽しさだけでなく少しの責任感や義務感が関わりやすさにつながることもあるが、それを前面に出すとやらされ感になるため、伝え方に戦略性が必要である。

○委員発言：

公園や学校の周辺には、スポーツ団、野球チーム、ソフトテニスなど多くのステークホルダーが存在する。希少なグラウンドをめぐってぎくしゃくすることもあるが、同じ法被や共通の活動をふわりと被せることで、既にある接点をつながりの機会に変えられる可能性がある。

○企画調整局：

小学校が既に行っている公園清掃にビブスを持って行き、着てもらっただけでも、緩やかに取組を被せることができる。企業のボランティア活動やログハウスメーカーの購入者グループなどにも声を掛け、義務感が過ぎないようにしながら楽しめる接点を実験している。

○企画調整局：

第衆は登録も報告もオンラインで行っており、LINEを使ったゲーム性のある仕組みも検討している。プッシュ通知で「指令」のようなメッセージを送り、秘密の番号で電子キーボックスを開けるなど、子どもたちが楽しく関われる仕掛けを考えている。まずは遊び心を持ったデジタル活用が突破口になり得る。

○委員発言：

デジタルには、見えない人同士を緩やかにつなげ、個人を集合体にする力がある。オープンストリートマップ、Wikipedia、iNaturalist、FixMyStreetのように、個人の知、体験、経験値を蓄積し、記録して共有し、増幅し、継承するツールとして使えるとよい。

○委員発言：

LINEやSNSは、使い方によっては鋭い刃物のようになる。ゲーム的な使い方では大きな問題は少ないかもしれないが、オンラインでつながるには何らかのルールが必要であり、横展開するには使い方の決め事が重要である。高齢者向けボランティアポイントのように、デジタル活用は時間をかけて浸透する面もある。

トピック 4：開かれた公園の価値と包摂性

【論点】

公園は、公の施設でありながら利用の排他性が薄く、誰でも自由に出入りし、思い思いに過ごせる場所である。活動する人々が公園を支える一方で、地域への強い愛着や社会貢献意識を持たず、ただ一人で静かに過ごしたい人も包摂する場所であることが重要な視点として提起された。孤立・孤独が社会課題となる中で、話しかけられなくても、誰かの気配があり、排除されずに過ごせる場所の価値が論点となった。

【主な意見】

○建設局：

コロナ禍で公園の使い方は劇的に変わり、屋外で深呼吸できる場所、少し外に出られる場所としての見方が変わった。公園を使う人を単純にステークホルダーとして括るのではなく、いろいろな人がいろいろな形で使えることが重要である。

○企画調整局：

緑縁衆は個人単位から始められるものであり、誰かと一緒に何かをしなければならないわけではない。使われていないベンチの下には雑草が生えるが、一人の人が読書に来るだけでも踏み固められ、維持管理につながる。まず来てもらうことがスタートであり、一人で過ごすことと管理への関わりは両立する。

○委員発言：

東屋にタバコの吸い殻が落ちてしていると、来てほしくないという感覚になりがちだが、単に排除するのではなく、来てもよいがルールは守ってほしいという語りかけが必要である。犬の散歩についても、糞を処理してほしいという伝え方を工夫しなければ、「来るな」と受け止められる可能性がある。

○建設局：

公園は受動喫煙防止の観点から禁煙である。飲酒は禁止事項ではないが、他の利用者に迷惑がかからないことが前提である。

○委員発言：

禁止事項だけでなく、「できること」を示すことが使いやすさにつながる。誰も使わないことが一番よくなく、一人でも使えばそこからつながりが生まれる。公園は排他性が限りなく低く、試行実験に適した場である。

トピック 5：公園から他分野への横展開

【論点】

公園の事例を、公園の中だけに閉じず、図書館、博物館、商店街、登山道、海岸など、他の公共的・地域的な場へどう展開できるかが議論された。全市展開を急ぐと画一的な制度になり、理念倒れになる可能性がある一方、現場ごとの手作りにこだわると広がりにくい。地域ごとの事情を大切にしつつ、活動の種や型、つなぎ手をどう設計するかが課題となった。

【主な意見】

○委員発言：

一人一人の現場を大事にすると広がりにくく、一気に広げようとする画一的な制度になりがちである。そのバランスが重要である。学校との連携は有効だが、先生の転勤で活動が終わることもあるため、学校を継続的なパートナーとして位置付けることができれば持続性が高まる。

○企画調整局：

公園以外でも、行政が場をつくる時には、いかに「やりたい」と思える行動でコミュニティをつくれるかが重要である。最初の種は小さいが、やりたい気持ちで動く人がいれば広がっていく。菜園でも、外で食べるスペースを作りたいという事業者の提案が出て、自然に隣の人と食べる可能性が生まれた。デジタルかハードかを問わず、きっかけをどう与えるかはどの仕事でも共通する。

○委員発言：

図書館や博物館では、おすすめのPOPを書く本棚衆や、ガイドをする人たちがいると、施設を違う視点で見ることができる。商店街では、軒先衆のように、軒先にベンチを置き、昔ながらの風景や店との接点が生まれると面白い。

○委員発言：

湊川の商店街で、タバコの自販機置き場を撤去し、地域の人が自由に借りられる図書館のような場所にした例がある。タバコから本に代わることで、緩やかな接点生まれ、お店の人の趣味や個性も見えるようになる。

○委員発言：

神戸の登山道も横展開の場になり得る。山登りをする人同士は挨拶を交わし、市民自治の基本となる関係が自然に生まれやすい。道に愛着を持てばごみを拾うことにもつながる。初めての人も排除されない一方、危険な場所や迷いやすい場所をどう伝えるかは課題である。

○委員発言：

地域通貨のように、良いことをした人にポイントを付与し、須磨海岸のごみ拾いに行く公共交通の移動費を実質的に下げるような仕組みがあれば、行動につながりやすい。

■会議終盤における市長及び座長の発言の概要

○久元市長：

公園というリアルで開かれた場所の管理においても、既にDXが活用されており、人をつなぐこと、一方的に情報発信すること、将来的にコミュニケーションツールとして活用することなどの可能性が見えている。次回は、市民参画を広げ、孤立・孤独を少なくし、孤立・孤独に陥らない地域社会をつくる上で、リアルとバーチャルの関係性、DXを使った人と人とのつながり、個人を集合体にしていく可能性を切り口に、DXを一つの材料として議論することが考えられる。神戸市が市民とのやり取りの中でデジタルをどのように使っているかについて、事例紹介を受けることも議論の取っかかりになり得る。

○品田座長：

ここ2回はリアルな場を中心に議論してきたため、次回はDXやデジタル化に軸足を置き、つながりをどうつくるか、孤独・孤立をどう防ぐかを議論する。デジタル戦略部又は企画調整局政策課等から、市民とのやり取りにおけるデジタル活用の事例、通知型の仕組み、市民が議論できるデジタルの場で苦慮している点などを聞き、それを手がかりに議論する方向で調整する。